

第34回鳥学講座

リュウキュウコノハズクの生活を追いかけて ～足環調査の継続で、現在進行形の進化を記録する～

講師：澤田 明 早稲田大学人間科学学術院助教

日本で長年行われる「鳥類標識調査」は主に、多くの地域で多くの鳥類の一部を標識し、渡りをはじめとする基礎的な生態の解明を目指しています。

他方、今回の話題であり、欧米を中心に長年行われる標識調査には、特定の地域で特定の種のほぼ全個体を標識し、生物進化の謎の解明を目指すものもあります。このような調査では、標識に合わせて個体のさまざまな情報を記録し続けることで、どのような個体が子孫を残しやすいかを明らかにしていきます。ガラパゴス諸島（エクアドル）のフィンチ類、Mandarte 島（カナダ）のウタズメ、ワイタム森（イギリス）のシジウカラの調査は有名で、広く進化学や生態学の発展に貢献してきました。



沖縄県南大東島のリュウキュウコノハズク個体群は 2002 年から現在に至るまでの 23 年にわたり、地域と種を限定した調査が続けられています。これまでに数千個体が標識され、標識個体の追跡により、彼らの基礎生態解明だけでなくさまざまな生物にも適用できるような生物学上の普遍的な問いに関する研究が進められています。例えば、近年の研究で、長期データから体の大きさが似ている者同士がつかいになる傾向が見出されました。さらに、なぜそのようなつかいが形成されるかについていくつかの仮説が検証されました。その結果、彼らは体の大きさにもとづいて相手を選ぶことで、似た者同士でつかいになっている可能性があることがわかりました。似た者同士のつかい形成は動物全般で知られており、種分化のメカニズムにも関わる現象です。リュウキュウコノハズクの長期標識調査からも、生物学に広く貢献する成果が得られました。

また、ここ数年では波照間島においても同様の標識調査が始動しました。島の生物には、生息地の範囲が明確なので調べつくせるなどの調査上の利点があります。そのため、島は古くから生物学研究の舞台となってきました。島は「進化の実験場」などとも表現されます。それゆえに複数の島で調査を行いその結果を比較することで、進化に関する理解を深めることができるのです。波照間島での調査もこのような意図で始められました。実際、南大東島と波照間島のリュウキュウコノハズクを比較すると共通点や相違点がたくさん見付き、面白い研究テーマが次々に生まれています。

今回の鳥学講座では、このような長期の徹底した標識調査だからこそ得られる研究成果や、このような調査の重要性、さらには基礎的な調査を続けることの苦悩について具体的に紹介していきます。

講師プロフィール

澤田 明（さわだ・あきら）：2021 年北海道大学大学院博士後期課程修了。博士（理学）。日本学術振興会特別研究員を経て、2024 年より現職。学部 4 年時より現在に至るまで 10 年にわたりリュウキュウコノハズクの調査と研究を続けている。鳥だけでなく生き物全般に興味がある。

日時：2024 年 11 月 2 日（土） 13：30～15：00

会場：我孫子市生涯学習センター アビスタ 1F ホール（千葉県我孫子市若松 26-4）

主催：我孫子市鳥の博物館・（公財）山階鳥類研究所